

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第三十二章

gift from the Grim Reaper

— 死神の贈り物 —

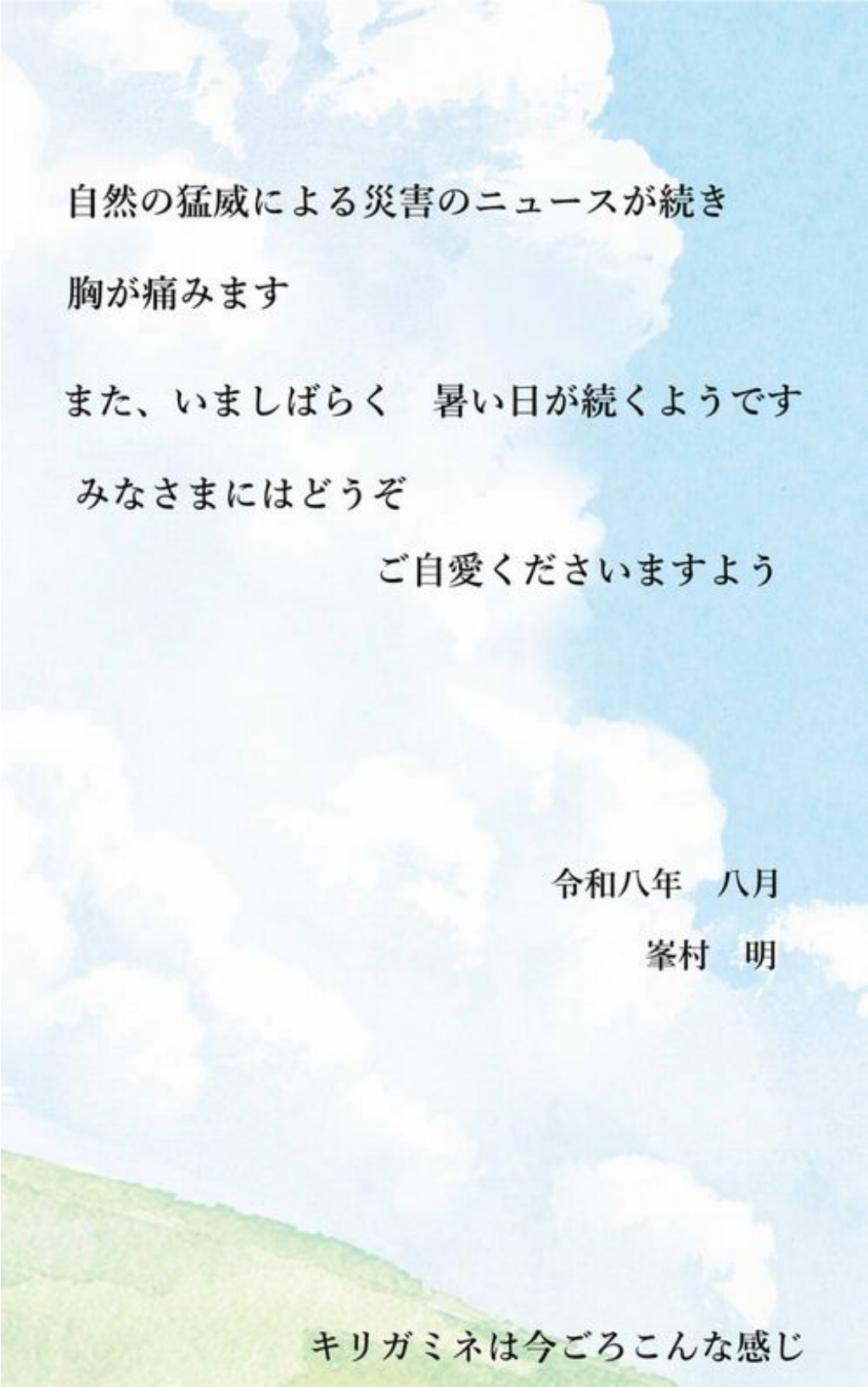
峯村 明

目次

gift from the Grim Reaper	
お見舞い	2
登場人物	4
gift from the Grim Reaper	6
あとがき	20
奥付	21

gift from the Grim Reaper

お見舞い



自然の猛威による災害のニュースが続き

胸が痛みます

また、いましばらく 暑い日が続くようです

みなさまにはどうぞ

ご自愛くださいますよう

令和八年 八月

峯村 明

キリガミネは今ごろこんな感じ

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
イリチャ	真の魂体
サーディク	H & L 財団・芸術部門責任者 (エドミールのステージネーム)
ボディガード X、Y	サーディクの護衛
竜門渕 優美子	
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チーム
ヘルガ	//
バーネット	//

cast32.JPG

gift from the Grim Reaper

309.

財団建物は古い城を改造したものだがだいたい左右対称になっている。正面奥にバンケットホール、右翼には本部の機構が、左翼にはスタジオ、劇場、宿泊施設、居住区がある。

その正面奥のどこかでなにかあった。

館内放送は職員は後報があるまでその場にとどまるようアナウンスしている。防火シャッターが次々と降りて館内を分断していく。だが火災ではないことを職員たちは気づいていた。火災報知器と音が違ったからだ。館内になにごとか異常事態が起こり、職員以外の一般人を保護する施策がとられている。

耳障りな警報音が鳴りをひそめ、館内放送がなにかいっている、そのなかをひろはひた走った。保安部が事態の確認に走っている。保安部員が所持している器械の信号で任意の防火シャッターをあけることができる。その彼らといっしょに。

彼らもまたバンケットホールを目指していた。保安部のモニターでも、この場所が真っ赤になっていた。しかし、開かない。モーターが唸るだけで、シャッターは上がらない。ひろは焦るあまり、「なんとかして！ 早く！」と保安部員を急き立てる。

保安員は「シャッターが歪んでしまって開かないんだ、そうだ、非常口へ！」と叫ぶ。「非常口なら手動で開くぞ！！」

非常口へ駆けつけると、作業着姿の女性が作業靴の底で非常口を豪快に蹴っているところだった。ホールの構造全体が歪んでしまって、非常口も開かない。

そこへ健といっしょに駆けつけたXが「どいてください」と非常口の扉に二度三度と体当たりする。

ぐしゃんと妙な音がして、非常口が開いた。作業着の女性とXは同時にうっと口を鼻を押さえる。中が見通せないほど粉塵が立ちこめていた。天井はぽっかりと穴があき、石

造りの壁の半分くらいが崩れている。見るも無残な有様で爆発があったといってもいいような光景だったが、火の気もそういう匂いもない。

ひろは先行するふたりを押しよけるようにすり抜けて中に踏み込んだ。ランニングシューズの靴底がじゃりじゃりと鳴る。「マミヤ！ 足元気をつけて！ ガラスが割れてるわ！」

ひろは迷わず、「真！」と呼んだ。

どこかで衣擦れのような音がした。はっと見渡すと、うめくようなすすり泣くような細い声。

「——真！？」

「……………ママ？」

「真！ どこにいるの！？」

瓦礫と粉塵の中でなにか動いた。

真はなにかを持ち上げるようにして瓦礫の間から頭をのぞかせた。「ママ！」泣き声で母親を呼ぶ。「助けて！ ママ！」

「今いくわ、真、動けないの……？」

床に転がる壁だの天井だのの残骸を踏んだりまたいだりして息子のそばへ行こうとすると、真はもがき、自力で這い出して立ち上がった。

「よかった！ ケガはない！？」

「助けて！ おかあさん助けて！！」

「どうしたの？ どこか痛いの？」

真はそこにいるのに——気持ちの悪い胸騒ぎ。立ったまま泣きじゃくっている息子を不審に思いながら手を差し出して抱き上げようとしたとき、息子の足元が目に入った。ひろは一瞬、絶句し、自分の悲鳴を他人のもののように聞いた。

発作のように悲鳴があふれて止まらない。足元に広がってくる血を涙にかすむ目がみている。

310.

真は母親の肩越しに父親の姿をみつけて「パパ！！」と叫んだ。ひろは涙をいっぱい

溜めた目で健をふりかえった。がくがくと体中が震えている。

「真は無事か、——ひろ——」

ひろは首を横に振った。そして「イヤ」とつぶやいた。

「パパ——」健は震えてしゃくりあげる息子の頭を肩に押し当てて、「おかえり」と言っ
てやり、首を振り続けるひろごと、作業服の女性に任せた。

瓦礫を素手でどける。瓦礫にガラスかなにかが混ざっていて、健は手に鋭い痛みを覚
えたがかまってはられない。

建物から突き出す形になっているこのホールに何かが落ちて、潰してしまったのだ。石、
あるいは石様の素材は崩れて、耐震補強材がむき出しになっている。まるで——出来た
ての廃墟だ。瓦礫の下からイリチャの全身があらわれてくる。

健は上着を脱ぎ、ゆっくり膝をつく。瓦礫の中に横たわっているイリチャにかけてやる
つもりだったが、正面に膝をついた男の手がのびてきて、その動作を遮った。

健は呆然と呟いた。「片方の腕が——ない」

本来あるはずのものが無い。思考が停止するようなショック。

正面の男はうなずき、「大丈夫、生きてる」、と言った。彼もまた作業着に編み上げブー
ツという、非常口を足蹴にしていた女性と同じ格好だ。言いながらケガ人の体のあちこ
ちに触れ、それからイリチャの頭をそっと持ち上げ、健の上着を丸めて頭の下に入れた。
「ヘルガ！ コンテナをこっちへ回して。ケガ人を収容する」

頭を持ち上げられた時、イリチャの意識がいつときもどった。

「イリチャ！ わかるか、オレだ！」

「あまりしゃべらせないで。どこが傷ついているかまだわからない」

しかしイリチャはなにか言いたそうだ。

「なんだ、医者じゃべるなと言ってるが」

イリチャは荒い息を時間をかけて整えてから言った。「——目測まちがえた」「さい
てー」

健はあきれてため息をついた。「おまえなあ」

聞こえないような声で「真は——？」と問われ、健が「真は無事だ。ここは“うち”だ、
安心しろ！」と応えると、みるからにほっとした様子で息をついた。

「腕、死神に持ってかれちゃった。取り返しに行かなきゃ——」

「元気になってから考えろ」

「う……ん……」 イリチャはまた意識を失った。

「ドクター」

「はい？」

「腕、取り返したら、くつつくのか？」

「取り返しに行くつもり！？」

「……………」

「無茶なことは考えないで！ だいたいこの出血、すぐに輸血をしないと！！」

大型のコンテナ車が裏手へ入ってきてホールの隣に横付けされた。ドライバーも助手席の人間も……彼らも医者だった……みな同じ、作業着姿。彼らは手早く後部ドアを開けてストレッチャーを引っ張り出してきた。けが人の惨状を見てもびくともしない。財団が所有する唯一の航空機はこのグループの専用で、彼らはそれを使っていつでもどこまでも救命に飛んでいく。コンテナは現場へ到着すればそのまま診察室・兼・病室・兼・手術室、つまり野戦病院になる。ふだんはブリュッセルなどにいないのだが、今回はたまたま、一仕事終えて薬剤の補給と機材のメンテナンスに来ていたのだという。

ストレッチャーで運ばれていくイリチャを見送るひろは誰にともなくつぶやいた。
「彼……どうなるの……」

隣に立つ女性は落ち着いた声でいう。「古今東西、事故や戦闘で腕を失くす例はそれほど珍しいことじゃない。それに、ちゃんと生き延びるわ」
それは事実なのだろう。が、ひろにはひどく無神経な言葉に聞こえた。声にならない声で呻く。

「マミヤ」女性はひろの耳元でささやく。「母親の動揺に、子どもは驚くほど敏感よ。ウソでいいから、笑ってなさい」

「ケガは左腕欠損、両目にガラスの細かい破片が入っている。問題は血液です」

左腕か……と、「つい、一日二日前、左肩の骨を砕く、大ケガをしたばかりなんだ。弱り目に祟り目だな」つぶやく健をヴァリス医師は見遣る。

「彼のは非常にまれな血液型で、便宜上、O型の亜種に分類されますが、抗体の関係でA型・B型はもちろん、O型の赤血球も輸血すると凝集反応を起こしてしまう。こういう場合、輸血には原則として同じ血液が必要です」

「そんなの！ 無理だろ！」

「ええ、ですから、同じ型の赤血球製剤を輸血するしかありません」

健は険しい表情でそっとため息をつく。なにを言っても始まらない。だいたいイリチャは魂体でありながら、血が流れる生きた生物体でもある。それに、もしヒューダーの記憶が正しければ、爆発的な力を発揮する故に婚姻を禁じられた、異種族同士のハイブリッドなのではなかったか。そのことが彼の血をより特殊なものにしているのかもしれない。そんなことを考えながら、健自身の血液が使えないか、検査を申し出るが、「あまり意味ないですね」と無情な言葉が帰って来ただけだった。

隣の手術室では輸血の準備が進められている。中心にいるのはさっきひろと話し込んでいた女性。レルは彼女をヘルガと呼んでいた。彼女も医者らしかった。モニターで見るともなくその様子に目をやっていると、誰かが部屋に入って来た。

手術着でも作業着でもない、黒衣の、女性。そのひとを見て、健は絶句した。とっさに言葉が出て来ない。しかし彼女の方は健を認識し、目礼してきた。そして、言う。「あの血液があれば——」

レル・ヴァリスは聞きとがめ、その言葉を発した女性を振り向いた。「あの血液？」

「イリチャとは真逆の意味で、とてもまれな型で。相手がどんな型でも関係ない。どんな血液型にも適合するのです。副反応が起きないどころか、相手の血液を活性化させてしまう。つまり、他者に輸血すると、傷がたちどころに治ってしまいます。かつては、魔法力によって患者の組織を活性化させ、ケガを直すことができましたが、それと同じような作用を持っています——」

「それはまた夢みたいな話ですね」

「ええ。あまりにも夢のような話だし、すると、持ち主の身が心配にもなります。いろいろな意味でね」

「その、持ち主というのは？」

「さる高貴な一族の男性、それも直系の男性のみが受け継ぐのです。たぶん、女性が受け継ぐと際限なく広まってしまうからじゃないかしら、そしたら、地上最強の一族ができてしまうわ」

「へえ。で、その高貴な一族とは？」

「黄金門の王家」

健は目で探した。ボディーガードのXを。Xもまた驚愕の目でヴァリス医師を、黒衣の女性を見ていた。

「やつだ！！」、と叫んだのは健ではない。Xである。

Xはものを言う時間さえ惜しんで部屋を飛び出して行った。

健はXの背へ叫んだ。「保安部員を連れてけ！ シャッターを開けてもらうんだ！」

312.

不便なものだとXは廊下を走りながら考えた。電子的な通信手段がいっさい使えないというのは。結局、頼りになるのは自分の足だけだ。

途中で何かが足もとを走り抜けていった。ネコたちだ。彼らは常宿を持っているようで持っていない。桧山家にいたりドストエフスカヤ家で世話になっていたりする。幽霊のようにドアのちょっとした隙間をすりりと抜けてしまうから、事故現場にいたとしてもおかしくなかったし、盗み聞きでもしていたのか、Xが走っている理由を知っているようだった。体が延び縮みしてまるで弾丸のようだ。さすがに全力疾走するネコには追いつけない。誰でもいい、とXは思った。やつを取り押さえてくれ、頼む！！^{マスター}

息せき切ってユミコの部屋にたどり着き、事情を説明するのももどかしく、すぐにバン

ケットホールへ来てくれとサーディクを説得する。バンケットホールと聞いて当然、サーディクは怪訝な顔をする。こんな時間にそんなところへ？

「追々説明します、とにかく、お急ぎください！ ケガ人がいるんです！」

「ケガ人と私と何の関係が？」足元で二匹のネコがパンツに爪を立て、うにゃーうにゃーとせつついてくるのがなにげに疎ましい。

「ホールで爆発かなにかがあったのでは？ あの警報はきっとそのせいです。行ってみましょう」Yが同僚を援護すると、ユミコが口走った。

「そのケガ人というのは、もしや——」三人組はそろって思わずユミコを振り返った。「胸騒ぎがするのです、お願いします、Xさん、私も連れていってください！」

おとなしやかに見えたユミコは屈強なボディーガードに押し迫り、Xは主人の同意も得ずにうなずいていた。

＊

バンケットホールの庭に面したテラスがあった場所に、見たこともない大型車両が止まっていた。サーディクはその中に無理やり押し込まれた。嫌も応もない。彼を誘導して来たネコたちは、中に入ろうとはせず、庭へ出て行き、芝生の上を犬のように転げまわった。

サーディクを出迎えたのは薄青い手術着に、輝く注射器を片手にした老年の男だった。「どうぞ、落ち着いてください」、と彼は落ち着いた声で言った。

「落ち着かせてくれ！！」

「深呼吸して。吸って、吐いて。すぐに済みます。詳しい説明はのちほど」

「先に説明しろ！！ 私を何様だと思ってるんだ！！」

「採血させていただきます、最初だけちょっとちくんとしますが」

「さ、採血っ！？」

「なに、平気ですよ」老医師はマスクの下でにっこりと微笑み、献血者の肩を軽くたたいた。

ユミコは車内に目を走らせている。「移動病院？ 奥に手術室？」さすがは病院理事長。輸血が必要ということはかなりの重傷なのだろうと、そちらが気になって採血に抵抗するサーディクの動きを封じるにもうわの空である。

「マダム」、老医師はユミコに丁寧に声をかける。「手を握って差し上げては。そうすれば落ち着かれるでしょう」、と提案した。

「え、いや、そんなことをしてもらわなくても！」

ユミコには一応、医療の心得がひとつおりある。老医師の提案はもっともだと思い、サーディクの手をぐいとかんだ。

313.

手術室へ続く廊下の向こうでドアが開閉し、一瞬、尋常でない雰囲気が出て来た。老医師は表情を引き締めて立って行き、手術室前室から出てきた男に鋭く尋ねた。

「どうしたんです！」

「イリチャが暴れてる。『死神が来た』というんだ」

サーディクとユミコ、XとYは、はっ、と顔をあげた。

「ベネトナシュのやつだ。エントランスで面会を申し込み、断ると、お見舞いを届けに来たから受け取りに来いと」

「お見舞い！？」と老医師。

「どこまでもふざけた奴だ！ 受け取るまで何度でも来ると言うんだ！ 冗談じゃない！ 何度も来られてたまるか！！ サーディク、ちょっとXを借りるぞ、X、怖くなかったらいっしょに来てくれ」

「ここここ怖くなんかありませんよ！ マスター、ちょっと失礼します」

健は採血が始まったばかりのサーディクをなにげなく見て、あ然とした。美しい日本人女性に手を握られているではないか。その女性は――

「に……西ノ宮さん？」

「桧山さん……」

＊

興味本位にせよなんにせよ、いろいろ聞きほじりたいのは山々だったが、ここは死神のお見舞いをやっつけなければならない。本部のエントランスへ走る健とXの背後で、ユミコは、彼は亡くなった娘と学校がいっしょだったのだと懸命に説明していた。

＊

「お初にお目にかかります」今度は静かな女声。あわただしく人が入れ替わる。老医師は背後に退いている。

「黄金門の、バイスロイさま？」

「——貴女は？」

「私はアルチニア」

アルチニアは深く礼をとり、ユミコはサーディクの手を離して老医師と共に背後に退いた。

「黄金門のお方の血液をイリチャに輸血するよう進言したのは私です。それが彼の生命をつなぎとめるひとつの焦点であったので」

「なるほど……」バイスロイと呼ばれた彼の理解は素早かった。黄金門の血の特殊性を知っていて、なおかつ理解しているのは世界広しといえどそう多くはない。バイスロイ自身、己の血の取り扱いには重々注意するよう、厳しく教育されていた。それはこの世界においても変わらない。そしてこの女性はおそらく『化学者の館』の……

「血液型は合うのか？」

「あなたがポルタアウレア大公家直系の方である以上、血液型は問題ありません」

「聴いてもよろしいか、イリチャはなぜそんなケガを負ったのです？」

こうして、サーディクはようやく、真の誘拐とイリチャ負傷の顛末を知ったのだった。

314.

死神はH&L本部建物の正面玄関から入って来たが、それ以上中へは入れなかったようだ。真を連れ出したのがウィンディだったことを考えると、死神の侵入をはじく何かがある.....シャッターのほかに.....働いていたのかもしれない。

こいつのことを考えだすと雑多なことで頭がいっぱいになってしまう、と健は思う。それとも、そうするのが目的なのだろうか。こいつには他人の頭の中に疑心暗鬼のタネをばら撒くという芸当ができるのかもしれない.....

全身黒い色で統一した服装に、夜にもかかわらずフードを深く被っている。すらりと、というより、ひょろりと丈高く、斜に構え、口元に浮かべた微笑はなんのつもりだろうか。ピエロの顔は仮面だ。この男の素顔は死神にふさわしく、髑髏。上等の皮手袋でホネの手を覆っている。

「ごきげんよう」、と死神は朗らかに言った。嘲笑しているようにも見えた。「彼の具合はどう？」

「痛がって泣きわめいてる」

はあ、とため息をつき、死神はかぶりを振る。「強情張らずに手を離せばいいものを。ワタシはどうしようもなかったのだよ」

「手を離せばよかったのは、そっちだろう」

イリチャは、片手で真を保護し、片手を死神に掴まれてしまっただろうもなかったと言っていた。死神のは、『真を手放せばよかった』という意味だろうか。またぞろ、イヤな考えが沸き起こる。背後のXから警告。（挑発に乗ってはいけません！）

Xの経歴など知る由もないが、ボディーガードであるだけでなく、マスターの秘書的役割も務めているらしい。腕っぷしは強く、体力もあり、ポルシェの運転など、持ち主の健よりスムーズで上手い。文武両道なのだ。このあたり、H&Lの人間とちがう。見回したかぎり、H&Lにはこういう武闘派はいない。

「いやいや、ワタシはお見舞いに来たのだった。キミの機嫌を損ねたのなら、謝るよ。なんの関係もないキミとコトを構えるつもりはない。五体満足で傷ひとつない彼を引き渡

して欲しいだけさ。それがワタシの主人の望みだからね。はい、これはお見舞いの品」

死神の手に、ふっと塊が現れた。五十センチくらいの長さで、細長い。長方形。包装され、白いリボンまでついている。なにげに健はぞくとした。その形状、そのサイズ。

「さ、受け取ってくれたまえ」

Xがつと前に出てきた。「私が」と。ガード対象者に得体の知れないモノを触らせてはならない。死神は、ぽん、と放ってきた。両手で受け取ったXのリアクションからすると、見た目よりもけっこうな重量があるらしかった。彼の額にどっと汗が浮かぶのを健は視界の隅でとらえた。

（間違いない。これは——）

「渡したからね。くれぐれも大事に扱ってくれたまえよ」

「待てベネトナシュ」

「ワタシは無関係のヒトと話をする権限を持っていないのだよ。ではそういうことで。あ。急いだほうがいいよ」

死神は向こうをむいたままひらひらと手を振り、暗闇のなかへ溶け込んでしまった。

315.

「ご協力を感謝します」、と執刀医は言った。血液提供者に対して。

「.....役に立ちそうかな」

「もちろん！ 彼はかなり危険な状態だったんです。あなたのおかげで命拾いしました」

「ならいいのだが。それにしても、きみがH&Lにいたとはな。父の手術をしたのはきみだろう？ あのままと捕まえておくんだった」

「あいにく、ぼくはまだ学生だったので教授が間に入ってくれた」

そういえば。サーディクははたと気がついた。採血担当の老医師！ 見覚えがあるという気がしてならなかった。「あの医者はずちの親父の主治医じゃないか！！」

「ああ、ドク・バーネットね」

バーネット教授はモナシュ大医学部の教授だった。近年定年退職し、今はレルの仕事を手伝っているのだという。もっとも本人に云わせると、「レル・ヴァリスの無謀な計画を思いとどまらせようとするうちに、逆に取り込まれてしまった」のだそうだ。みごとにミイラ取りがミイラの図である。

サーディクは不機嫌にいった。「師匠と弟子がこんなところで顔をそろえているとは！ 親父になにかあったらどうしてくれるんだ！」

「え、あれ以来発作起こしてないでしょ？ これからも起こすことはないと思うけど？」

ヴァリス医師はしれっと言った。言われてみればたしかにそうだった。

ユミコの目には、この執刀医の男は二十代前半に見える。（この年代ではまだ研修中のはずだけど……）

「ケンが戻ってきた」、ヴァリス医師が言うと、コンテナの後部扉が開いた。何重にもなっている一番外側の扉である。それから滅菌し、内部へ入るのにしばらく時間がかかった。

帰ってくるなり、ケンと言った。「お土産だ、レル」

執刀医はケンとXが掲げている白いリボン付きの箱とを交互に見た。「まさか——」

「そのまさかだ。取り戻しに行かずにすんだぞ。急いでくれ、死神もそう言ってた」

「接合手術！ 大至急！」「よしきた！」バーネット医師は生き生きと腕まくりした。

「ケンとXも！ イリチヤは麻酔が効かないんだ、また大暴れするぞ、押さえつけるのを手伝ってくれ！」

みな、慌ただしく手術室へ消えていく。ユミコはへなへなとその場にへたり込んだ。

「麻酔なしで！？ 腕をくっつけようというの！？ 正気！？」

316.

折り畳み式のイスで折り畳み式の小さなテーブルの前に座り、祈りながら考え、考えながら祈る。竜門渕の家とイリチャとの関係について。

祖母の代に神事の一切から退いた竜門渕家は、ユミコの世代にはもはや“無い”ものだった。彼女の姉妹は全員結婚して姓が代わっていて、ユミコも例外ではなかったのだが、離婚に至って、竜門渕姓に戻ったのだった。今となってはただひとり、その姓を名乗っている。

竜門渕が延々と引き継いできた神事は当主とその後継者しか詳しく知らされていない。ひじょうに個人的なことだったからだが、彼女たちは総じて強い力をもっており、それは子孫たち住民たちに伝播していき、協同体の中でも強い力を持つことになってしまった。

どういう訳か祖母はユミコをかわいがった。

竜門渕が延々と見守って来たのは、始祖の封印された子である。

本来当主しか知らないそのことを、ユミコは祖母から聴いた。しかしそれはあまりに秘密めいていて、科学万能、物質にあふれた現代に生きるユミコには信じがたい話で、かわいがってくれる祖母にはわるいが、まるっきり聞き流していたのだった。

それが昔話や作り話などではなく、真実だったと知ったのは、キリガミネでスクナに会ってからである。スクナとの再会はユミコにじつに多くの情報をもたらしたのだった。

始祖の封印された子。オリカルクムの円盤に封じられたその子の名はイリチャ。イリチャとは母である始祖がつけた名ではない。はるかのちの世に他人がつけたものだ。

時至り、オリカルクムが崩壊し、封印が解けるまで、始祖の子孫は彼を見守り続けた。彼が人の子の魂体として生きることを認めた神々との約束でもあった。そして祖母めるのの代において、じつに二万年が経って、それは成就した。始祖の子孫・竜門渕の使命は終わったのである。

終わったはずだったのだ。

実の娘を失くし、娘の父親からは縁を切られ、ひとりになって竜門渕を名乗る自分が、

たった今そのイリチャのために祈っている。

ユミコは己の魂がメッサナのメルノであり、始祖ミツハではないことを知っている。だがそれがなんだというのか。始祖の血が己の中で脈打つを感じる。イリチャは彼女の子でもある。神々の激しい怒りによって、生まれた直後に引き離された母と子。イリチャは母親のことなどおぼえてもいないだろう。むしろ恨んでいるかもしれない。

じっさい、イリチャのなかではこれが一番近かったのだが、彼は母親の存在を認めていなかった。

それでもかまわない、とユミコは思った。彼の苦痛は私の苦痛でもあると感じた。彼を世に送り出したミツハの痛みなのだ、と。

『そなたには魂の傷を癒す力がある』とスクナは言った。『そなた自身が深く激しく傷ついた魂である故に』

（ そんな力が私にあるなら、出でよ。今この瞬間に…… ）

あとがき

第二十三章・初版 (2025 年 7/31 発行)～最終章・初版 (2026 年 2/15 発行) をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026 年 7/25 以降発行が新しい版です)

と、毎回お願いしております。

最新版だけ 見てやってください！

お願いいたします m(____)m

冒頭のお見舞い続きで、ミネムラは書きまくってるため昼夜逆転してますが、元気デス

2026 年 8 月 23 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十二章 gift from the Grim Reaper

2026 年 8 月 24 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラスト A C」 「Chat GPT」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト イラストAC
イラスト ChatGPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社